

第13回（最終回） 湯たんぽ異聞

【今回取り上げる論文】

伊藤紀之（2007）「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅰ」
『共立女子大学 家政学部紀要』第53号

▼こんな人がいたなんて

こんなものまで研究をしている人がいるのを、今回の論文で知ることになった。中にお湯を入れて冷えた身体を温めてくれる、あの「湯たんぽ」である。

論文の「1.はじめに」には、研究の動機がこう記してある。

「本研究に至った契機は、地方に出かけたおり時間調整の為に立ち寄った古道具屋（島根県益田市）で、湯たんぽに出会ったことにはじまる。」

完全に趣味だ！

湯たんぽといえば、いまではちょっとしたエコグッズとなっている。金属やゴムをはじめいろんな材質のものがあったり、カバーにはキャラクターのイラストの入った、いかにも女性が好みそうな、かわいいものまである。石油も使わないし、電気も使わない。お湯を入れるだけで、けっこう温かさが長持ちする。最近では、電子レンジで温めるタイプのものなんかもある。冬はお湯を、夏は氷を入れて、なんて季節を問わない商品まであって、今非常にアツい暖（冷？）房器具である。

しかし、この論文では、そんな時流とはまったく別の次元で、湯たんぽが登場する。

あたら才能の無駄遣いをしていらっしやる……しかも、論文のタイトルが「……に関する考察Ⅰ」って！じゃ「Ⅱ」もあるんかい！ まだ続けるつもりかい！ 私は最初、そう思った。しかし、まもなく私は浅はかだったことに気づかされる。

この論文と出会ったことは、いまでは運命だとすら思えるのである。意外にも湯たんぽに潜んでいたミステリー、そしてなぜ湯たんぽだったのか……。そこから、私と湯たんぽ研究者との物語がはじまった――。

▼謎の道具、それが湯たんぽ！

目まぐるしく変化を遂げる生活機器。i P h o n e だって、100年後にはなんの道具かわからなくなっているだろう。過去の生活機器のなかにも、そのような、いまとなってはなんなんだこれという「謎」の道具が存在する、そして、そのひとつが「湯たんぽ」であることが、この論文を執筆した伊藤紀之先生（現共立女子大学名誉教授）の研究で明らかになっている。

まずは見た目からして謎である。「え、これ湯たんぽだったの!？」なんていう、想像もつかない形のものがあったようだ。

たとえば、犬の形をした空の陶器。江戸時代に、徳川綱吉が愛用したと伝えられるそれが、いったいなんのためのものか、長らくわかっていなかった。それが湯たんぽであることを明らかにしたのが伊藤先生であり、また綱吉ではなく家光のものだったとつきとめたのも伊藤先生だ。徳川家とえば、家康が愛用していたという、背もたれ型の「凭れ掛け」（座椅子のようなもの）湯たんぽもあるという。

伊藤先生の所属は、家政学部。たぶん研究の一貫なんでしょうけれども、この論文を読むと、完全に純粋さと熱量だけで走っていることがわかる。この姿勢こそ、学問の徒ならではである。

研究方法に関しては、「各地の湯たんぽを収集する」というやり方で、湯たんぽの「形態成立とその変化」を追うというのだ。いろんなマニアがいる骨董業界でも、「湯たんぽ」を集めている人はなかなかいないらしく、いないということは体系化されていないということなので、ジャンル自体を俯瞰してみることができる人もいない。そこに伊藤先生が登場し、地方の骨董屋が「妙に口の小さい花瓶」と分類していたものなどを「湯たんぽだ！」と特定するのである。その過程で、先生が収集した湯たんぽコレクションを論文に写真付きで披露されている。

また、資料については、元の所有者、使用していた地域、収集地をできるだけ調査したようだ。たしかにその湯たんぽの来歴を調べることはとても大事かもしれないが、思えば気が遠くなる作業である。こうして、伊藤先生のコレクションは、鹿児島から北海道まで全国に及び、海外のものまで含めると300点弱（海外にも湯たんぽがあったのだ!）。ここまでくると、「湯たんぽ博士」と言うしかない。

▼消えた湯たんぽ

伊藤先生は、調べていくうちにあることに気づく。湯たんぽがはじめて日本の歴史に登場するのは、室町時代。文明 17 年（1485）に、現在の大阪の堺で、手足の麻痺や足の冷えに、「湯婆」を使用していたことが当時の資料にある。おそらく湯たんぽの先祖だろう。これらは中国経由で医療器具として伝来し、先述のとおり、家康や家光も使っていた。庶民にまで普及していたかという疑問だが、とにかく湯たんぽは古くから使われていたのだ。

しかし、その後、湯たんぽは資料からぱったり姿を消し、次に登場するのは、ようやく明治に入ってから。夏目漱石が明治 14 年に詠んだ句に「湯たんぽ」を季語として使っていて（「なき母の 湯婆やさめて 12 年」）、ほかに『道草』（大正 4 年）にも湯たんぽが出てくる。

この間、森羅万象 3900 種の生活の品々を書き残した葛飾北斎の浮世絵にすら、湯たんぽの描写がない。これはおかしなことである。

そこで湯たんぽ博士、いや“湯たんぽ探偵”は、海外の資料にもあたってみた。鎖国していた時代に、こっそり日本に来ていた外国人たちが、日本の生活用品に関して、なにがしかの記録を残していないかと調べたのである。

すると、シーボルトが綿密に残した資料にも、さらに、明治初期に 5000 点もの陶器を収集したアメリカ人、エドワード・モースのコレクションにも、湯たんぽは存在しない！ まるで記録が残っていない！ なぜだ!? ここで、伊藤先生が発した一言。

「湯たんぽの謎は、深まるばかりである。」

謎が深まっちゃったよ！ なんだよ調べてわかったことを書いてくれてるんじゃないのかよ！と思わずツコミたくなるのだが、落ち着いて考えてみよう。知ろうとすればするほど、逆に知らないことが増えていく。一見、パラドックスのようにも思えるが、しかし、学問を極めようとするれば、このパラドックスは避けて通れないものなのだ。宇宙研究でも、量子力学でも、謎が解けた分だけ、さらなる「謎」が倍以上跳ね返ってくる。学問は、この繰り返しの中かで、それでも研究を止めない者たちの不断の努力によって進化してきた。この「湯たんぽの謎は、深まるばかりである。」という言葉の裏には、新たな謎に出くわしたときの、心の底からの喜びが読み取れる。このあたりまできて、私は、これはなにか、尋常ではない、深淵なるものに触れている感じがしてきた。笑いながらも、真剣になにかに向き合っている人の強さを目の当たりにしたのだ。

話を論文に戻そう。

先生は、謎が深まったと言いつつ、「湯たんぽがなぜ消えたのか」ということについて、以下のような仮説を立てる。

家光の使用していた犬型の湯たんぽの「栓」は「ネジ式」である。当時、アジアにはネジという文化がなかった。ということは、これは西洋伝来の品として将軍に献上されたものであるということの証拠である！

そう考えると、なぜシーボルトやモースの資料の記録に残っていないのか、説明がつく。なぜなら、舶来品だったから、すなわち彼らにしてみれば、故郷で見慣れた日用品だったから、全く響かなかった。だから、わざわざ記録に残していない、というわけである！

西洋の品ということは、庶民が使っていたという記録がないのも当然である。それが、明治に入って、日本の鉄道網が整備され、流通網が発達したことで、舶来品のコピー商品としての湯たんぽが日本各地の窯でも大量生産されるようになった（実際、漱石の時代の「湯婆」は、蓋にネジが使用されているところなど、当時の「英国製の湯たんぽ」とよく似ている）。こうして庶民の手にも届くようになり、漱石が句に詠んだり、正岡子規も季語の題材として使われることになったのである。

ネジに着目したところなど見事である。研究者としてのすべての知識を動員して、この「湯たんぽ」というニッチなジャンルの解明にあたっていることがわかる非常に熱い部分である。つまり、室町時代には中国経由だったが、江戸期にはすでに舶来品だった可能性がある。

こうして、湯たんぽに憑りつかれた男の物語は、このあとも続く。その後伊藤先生が大学を定年になる 2011 年まで、「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察」は、第 5 弾まで発表されているのである！

在職の研究者としての最後の 10 年間、先生は、湯たんぽに没頭している！ 何者なのだこのお方は！ 湯たんぽの、いや先生への謎は、深まるばかりである。

▼伊藤先生からのコンタクト

この湯たんぽの研究論文を、TBS ラジオ「メキキの聞き耳」で紹介してすぐ、番組宛に封書が届いた。なん

と伊藤先生ご本人からである。放送後、知り合いから「あなたの論文が、ラジオで紹介されていた」と教えられ、ポッドキャストで聴いてみたのだという。

封筒には、その後発表した論文と、湯たんぼコレクションのカラー写真が同封されていた！ポッドキャストのようなアーカイブスがあることは非常にありがたい。おかげでご本人とコンタクトをとることができたのだ。

こうして私は先生と、メールのやりとりをするようになった。ちなみに、伊藤先生からのメールの件名には、いつも「湯たんぼ、伊藤」とある。湯たんぼ伊藤ってなんだよ、どこの芸人だよ！

その後、先生から、いままでに書かれたコラムなどの資料も届くようになった。骨董マニア向けの『骨董縁起帳』という雑誌には、ラジオで紹介されたことを次のように書いてくださっていた。

「湯たんぼ研究の波紋」

これまで私の講義は聞く者には退屈のようで、私語もなく今日は静かに受講していると思ったら、ほとんどの学生が机にうつぶせになって寝ていることがよくあった。

しかし、ラジオでは興味を引くように、趣旨をくみとってうまく紹介してくれていた。

喜んでいただいているようである。しかし、やはりというべきか、「寝ていることがよくあった」というところに、なんだか悲哀が感じられる。

私は意を決して、よかったら先生のコレクションを観にうかがいたい、とメールした。

先述の通り、先生は2011年3月、36年間在職した共立女子大学をめでたく定年退職。研究室に置いてあった湯たんぼコレクションも、いまは、自宅に移しており、返信メールには、「まだ汚くておみせできる状態ではない」とのこと。あれ、間接的に断られたのかな？

そりゃ、どこの馬の骨とも知れない、売れない芸人に、おいそれと、“家宝”を見せてくれるわけがない。これはもっと、信頼していただかないことには……。御年70歳というと、私の頭のなかにも、定年退職なされた私の指導教授たちの顔が思い浮かぶ。こんな、半分以下の年齢の若造が、ツッコんでいいような立場のお方ではない。

という、自戒の念は置いておいて、けっこういろんなところでこの論文を紹介していると、また先生からご連絡があった。どうやら、その間、コレクションを整理されていた模様である。メールにはこのように書かれていた。

「湯たんぼの展示室があるわけではなく、娘のアトリエの一部を利用しています。娘から早く片付けるように言われていますが、おいでになるのであれば待たせます。」

と。娘から片付けるように言われている！これは、家族の理解を得ていないパターンだ！

家族には邪魔もの扱いされているクチである。これは急がなければならぬ。先生に肩身の狭い思いをさせてはならない。

こうして、伊藤先生のご自宅にうかがうことになった。2011年5月のことである。

▼伊藤先生と邂逅

ご自宅に到着すると、左手すぐに倉庫のようなスペースが広がっており、そこは彫刻家である娘さんのアトリエだった。メールには「一部を利用」と書いてあったが、ほぼすべてのスペースを、140個くらいはあろう湯たんぼが占めていて、むしろ娘さんの作品が「一部」だった。これでは早く片付けろと言われても仕方がない。先生の湯たんぼコレクションは、茨城の倉庫にも150個くらいあるというから、合わせて300点弱である。退官する際に、大学に寄贈しようとも考えたが、断られたという。

そう語る伊藤先生は、どの一流学者もそうであるように、物静かで自ら語らない雰囲気醸しだしていた。知っていることが多くなればなるほど、安易に語ろうとしない。しかし、ひとたび口を開くと、堰を切ったように話しはじめ、自分の研究を理解してくれそうな若者に、注ぐ必要のないエネルギーをもって語っていたのである。

自己紹介もロクに終わっていないところから、「まずこの3つが、最初に出会った湯たんぼ」という説明から入って、黙って聞いていたら、そのままほぼ全ての湯たんぼの解説に突入！140弱の1点1点についてである。

「湯たんぼの形態成立とその変化に関する考察Ⅰ」～「Ⅴ」に出てきた、あの時代を代表する湯たんぼオールスターが、いま一同に介している！完全に湯たんぼ伊藤マジックの術中である。

先生は2008年の論文「Ⅱ」において、1712年の「和漢三才図絵」に湯たんぼが記載されているのを見つけた。さらに、江戸期の美濃焼のなかに、湯たんぼらしき焼き物を見つけ、欠けている部分を自ら補う形で複製したりと、“病状”をさらに進行させていた。

2009年の論文「Ⅲ」では、西洋における湯たんぽの起源を探り、熱源がちがう暖房器具を広く調査し、それらが西洋絵画にどのように描かれているのか、綿密に検証されている。その中で、ランプラントやフェルメールの絵のなかに、湯たんぽ（西洋では「レッグ・ウォーマー」）が登場しているのを指摘されている。フェルメールの「牛乳を注ぐ女」なんてだれもが見たことある絵なのに、右下にある湯たんぽの存在に気づいた人はほとんどいないだろう。先生は、なぜか絵画史についても詳しい。

2010年「Ⅳ」では、素材と加工という観点から、江戸初期と明治初期における湯たんぽの制作過程、つまり「どうやって作ったのか」をより詳細に明らかにした。「Ⅰ」でも紹介されていた家康の湯たんぽは、徳利に形状が近く、実際当時は徳利に湯をいれて暖をとる習慣もあったことから、徳利の派生種として湯たんぽを位置づけたりもしている。

そして、定年となった2011年、最後の論文「Ⅴ」では「正岡子規の俳句を通して」という副題の通り、市井の生活を活写し、親しみ深い対象を詠んだ子規が、明治18年から明治35年の間に詠んだ、およそ2万3600句のなかから、暖房器具を季語にした句103句を集め、そのなかで湯たんぽの登場がどのあたりの年代に固まっているかを調べている。事情を知らない人にはなんのこっちゃだろうが、私にとっては最高の研究報告である。

アトリエ内にとこと狭しと並べられた湯たんぽの中に、論文の写真に「筆者蔵」として載っていたものがたくさんあった。要するに、自分で買ったということである。全国の古道具屋、そして窯元でも、「これはなんのために作られていたものか？花瓶？」と、用途不明のまま売りにだされていた品も多いらしい。それらのひとつひとつについて、先生は現地に直接足を運び、古道具屋との情報網を作ったうえで、入手してきたのである。こうして、先生は骨董業界において湯たんぽの第一人者になった。湯たんぽマジックの術中に完全にハマってしまった私は、目の前に広がるオールスター夢の競演に興奮を抑えられない。そんな私の気持ちを察してか、先生は熱心に説明を続けられた。

なかでも印象深いのは、前述した家光の湯たんぽについてのエピソードである。犬の形をしているがゆえに、お犬様で有名な八代綱吉のものとされていたこの陶器だが、用途がよくわからず、おそらく観賞用であろうとされていた。しかし、先生はそれが描かれた絵を見るなり、これは湯たんぽではないかと推察した。

その話を、湯たんぽには微塵も興味のないゼミ生に、絵を見せながらしたところ、学生の中に「この絵を見たことがある」という者がいた。聞くと、小学生だった頃、四谷大塚の歴史の授業で使われた資料の中で見たという。ここからが伊藤先生のすごいところで、その四谷大塚の講師を探し出し、その絵に描かれている陶器が、どこにあるものなのかを聞きに行ったというのである。そして、日光の輪王寺にあることを突き止めると、直接寺に出向き、ブツを見せてもらうようお願いした。こうして、そのブツが「湯たんぽ」であることを確認したのである。この、実際に自分の目で確認しなければ気がすまない、という粘着性こそが、学者の本質であろう。実物を目にしたときの興奮が蘇ってきたのか、どんなに淡々と語っても、笑顔になって溢れてくる。

途中、奥様がお茶とお菓子を運んできてくださった。私が奥様に、「どの湯たんぽがおすきですか？」と聞くと、奥様は笑って首を横にふるだけ。それ以上はツッコめなかった……。学究の徒をこれほど興奮させるものであっても、やはり家族にも、そして大学にも理解者がいない完全アウェーパターンである。こういう方はもっと評価をされなければならない。なぜなら、だれかが喜ぶからとか、役に立つからとか、そういう「不純」な動機で研究をしているわけではないからだ。これはもはや人間の「業」である。純度の高い「ボケ」なのだ。貴重である。

▼伊藤紀之の正体

なぜ先生が湯たんぽにたどり着いたのか。やはりこの疑問は晴らさないといけない。

それには、研究者・伊藤紀之の半生を振り返る必要がある。以下はご本人に直接聞いたもの、そしてご本人の著作などを拝見してまとめたものである。やや湯たんぽからそれるが、結果としてはすべてそこにつながっているので、是非知っておいてもらいたい。

伊藤先生は、大学卒業後、東芝で工業デザイナーをやっておられた。ニューヨークやイタリアでも働いていたというから、実は今でいう「バリバリのおしゃれ」職業についていたことになる。先生のデザインで有名なのは、富士フィルムのバレーボールチームのユニフォームや（川合俊一とかが着ていたやつである！）、ファッションブランド「SHIPS」のロゴ、鍋なども収納できる食器洗浄機……。マジでか、おいすごい人じゃないかと、さすがにここまで読んでくださった諸兄も、その実力を認めざるを得ないであろう。

もっと言うと、「家政学」というジャンルを定義した人物のひとつでもあり、家政学を「生活のデザイン」という位置づけで学問的にとらえようとした最初の世代なのである。「〇〇学」という学問の成立に携わった

というのが、この世代の学者のすごいところである。

また、国際浮世絵学会の理事でもあり、浮世絵も 300 点ほどのコレクションがある。自宅に鳥居清長の浮世絵があったりするのだ。絵画にも詳しいというのは、西洋絵画における湯たんぼの描写を一覧した「湯たんぼの形態成立とその変化に関する考察Ⅲ」を読んで知っていたが、まさか浮世絵コレクターでもあったとは！ まさに湯たんぼ博士であると同時に浮世絵博士でもあるのだが、おもしろいのは、その集め方である。絵師を軸に集めるのかなあと素人なら考えるかもしれないが、先生は「飛鳥山」をモチーフにした作品のみを集めている。こうした集め方をしているのは、日本では先生だけ。「おなじ対象を別の絵師が描いたらどうなるのか」、あるいは「別角度から描いたらどうなるのか」ということに興味があるというのだ。

それだけではない。先生は、ファッションプレート蒐集における第一人者でもある。ファッションプレートというのは、西洋の女性のファッションを描いた版画で、言い換えれば「これからくるであろうファッション情報を伝えるための図版」であり、18 世紀の英国やフランスの服装を活写している資料であり、19 世紀に爛熟期を迎え、20 世紀に雑誌などの台頭によって消えていった「おしゃれの手採色版画」である。先生は研究の成果をまとめた『ファッション・プレートへのいざない』（フジアート出版）という書籍も出版している。そしてその冒頭で、ファッションプレートに出会ったキッカケを、次のように述べている。

1977 年秋、ICSID（国際工業デザイン協議会）の会議出席のためアイルランドのタブリンへ行った。会議場の近くの 1 軒の古道具屋へたまたま入り、店の奥に古新聞や古雑誌の束があるのを見つけた。ひっくりかえしていると表紙は取れていたが革装の立派な本が出てきた。エングレービングの版画図版が 100 葉ほどとじ込まれていた……

お気づきであろうか。学会で訪れた場所の古道具屋に「たまたま」入ったパターン、まさに、湯たんぼとおなじ出会い方なのである。この男、懲りていない！

ファッションプレートのデザインと存在に猛烈に惹かれていった先生は、瞬く間に「ファッションプレート オタク」となるわけだが、それと浮世絵とで培った蒐集技術が、すべて湯たんぼ研究に結集しているのである。

また、学者としてのプライドを感じさせるこんな逸話もある。

あるとき先生は、38 歳で夭折した天才画家「鬨光」（あいみつ）の真筆を、ふとしたきっかけで入手した。その絵が、真筆であることを証明するために、調査を学芸員に依頼したところ、これは同時期に描かれたものがないから真筆と言えない、という答えが返ってきたことから、論争に発展。先生はあらゆる証拠を集めて、その絵が真筆であることを証明した（……実はまだ認められていない。一度結論を出すと、いかにれっきとした証拠を挙げて、ひっくり返さないのが学芸員の体質らしい）。

ここまで読んだら既におわかりだろう。先生が着手する研究対象は、まだ「ほかの人に掘られていないもの」であったり、「ほかの人にはない観点で整理できるもの」である。実は、この、手つかずで残っているジャンルを探し出すのが、一番難しい。学問とは、「問に学ぶ」であるから、問を探し出すのが一番難しいのである。デザイナーを経て、学者として様々なを研究し、家政学の第一人者となった先生にとって、この「問」が湯たんぼだった。現役の教員として最後の 10 年をささげたるに値するテーマだったのである！

ファッションプレートにせよ、湯たんぼにせよ、本人は「たまたま」古道具屋に入ったと書いているが、おそらくは時間のあるとき、国内や海外の古道具屋を何度となくのぞいていたにちがいない。そうして、何十回何百回とアンテナを張り続けているうち、自分の興味のアンテナと学術的価値がバッチリはまった研究対象に出会う。

ある意味、湯たんぼとの出会いは、伊藤先生にとって、必然だったと私は思うのだ。

そんな先生に、「湯たんぼの魅力は？」という、漠然とした質問をぶつけてみた。すると、かえってきたのが、

「同一の機能で、さまざまなバリエーションがあるところ。」

という答えである。

なるほど、そういわれてみると、機能は、お湯を入れて身体を温めてくれるという、ただひとつ。それでいて、長細い形状のオーソドックスなものから、三角形に近いもの、軽いもの、お湯が 30 リットルも入る巨大ものまで、それはそれはいろんなバリエーションがある。

そして、これは実は「お笑い」にも通じる。たとえば、「おなじお題で、いろんなバリエーションのボケ」の大喜利など、まさにそうである。

ところで、先生は湯たんぽを入手すると、かならず自分で使ってみるという。その際、何時に何度のお湯を入れると、翌朝の何時には何度になっているかを計測し、データにとる。その結果、お湯が最も冷めにくい形状に行き当たり、ついに、自らタジン鍋型の湯たんぽを作ったのであった。デザインは別として、機能面からいえば、これがベスト湯たんぽなのだそうだ。

工業デザイナーとして、人々が実際に使うものに触れてきた先生ならではの作品、といったところかもしれないが、新たな謎まで見つけ、新しいものの提案までできてはじめて、学問は本懐を遂げる。

そして、先生は湯たんぽ研究の成果を一冊の本にまとめるとも仰った。それは是非とも読んでみたい。

予想もつかない人生スゴロクを送ってきたように見えるかもしれないが、伊藤先生のなかでは、すべてつながっているのである。

こうして、先生と対面した4時間は、あっという間に過ぎていた。

▼その後の湯たんぽ物語

以上が、先生の「湯たんぽ物語」である。

しかし、この物語にはまだ続編がある。

あろうことか、伊藤先生が、湯たんぽについて沈黙をしてしまったのである。

先生からある日「もう湯たんぽ研究をまとめた本を出版するのをやめます」というメールが届いた。私が粗相をしたのかと思い、なにが起こったのか聞くと、とある自治体で主催する湯たんぽ展で使用されている図版が、先生が論文で紹介したものばかりだというのだ。

「湯たんぽ展」の講師におさまっているH氏というのが、「湯たんぽ研究家」を名乗っている骨董コレクターのようで、実は先生が湯たんぽ研究に着手したころ、それに興味を示して近づいてきたのだという。交流をしていくうちに、H氏が研究や収集のルールを知らないことに気づいた。先生の研究成果をさも自分が発見したかのように喧伝し、書くものにも参照元や引用元を示さない。再三にわたり注意してきたが、それでもおさまらず、今回の展覧会にいたって、事後報告で済ませたというのである。問題が、H氏にあるのはもちろんだが、事情をよく知らないばかりに、ロクに調べもせずこういう人物を起用してしまう自治体側にもある。

世の中のほとんどの人が、だれが最初に言い出したことなのか、どういう専門家がいるのか、そんなことは知らないし、調べようもしない。そんなことよりも、声の大きい人や調子のいい人が自分の手柄にしてしまい、人々はそれを鵜呑みにしてしまう。そんな構図が、この事件に象徴されているように思う。

先生の怒りは悲しみへと変わった。争うつもりはなく、そんな時間があるなら、まだ研究したいことがある。こうして、先生は沈黙した。

今後は、どのメディアに呼ばれても、タツオさん経由しか出るつもりはない、というお言葉をいただいた。ぜひ、先生の「湯たんぽ研究」を書籍にし、またいかに奇天烈でありながら偉大な研究なのかを証明していくか、それがいまの私の使命だと思っている。

珍論文には、役得がないかわりに、純度の高い情熱が詰まっているから。

そんな先生は、いまは研究のかたわら、油絵を描き、日展系の展覧会に入選したという。

また先生は、小説も書いている。

多趣味すぎるよ！

象の背中は、大きい。

これが現時点での、湯たんぽ異聞である。

—————「爆笑！ ニッポンの珍論文」の連載は今月で終了いたします。

連載をまとめたものは今年光文社新書で発売の予定です。

長い間、ご愛読いただきありがとうございました。